

春の多摩虫行事（山菜天ぷらとギフチョウをお楽しむ会）

皆さん、いよいよ 2006 年の虫シーズン開幕です。今春は‘グループ多摩虫’と‘群馬の蝶を語る会’の共催で恒例の表題の会を開催します。多摩虫会員でもある池沢、小出両氏が代表される群蝶会の方々には、すでに従来から参加とご支援をいただいております。内容に格別の変更はありませんが、今回は共催の名の下で行うことになりました。今年こそは快晴に恵まれる事を祈りながらいかに概要をご案内します、多数のご参加をお待ちしております。

日時：4/15（土）～16（日）

基本コース：晴雨決行

15日、13：00 新潟県長岡市（旧三島町）蓮花寺大杉公園キャンプ場に集合  
天ぷらパーティー後、17：00 宿泊先ホテル・ニューオータニ長岡に再集合・  
夕食と懇親会。16日朝食後解散

特別コース 1.2：\*天ぷらパーティー参加後日帰り可（事前に確定が必要）天候不良時中止も可（必ず連絡を要す）

\*天ぷらパーティーをパスして、夕刻のホテルから参加も可（事前に確定が必要また雨天中止は不可）

お願い：ビール、お茶、山菜と天ぷらの準備は会で用意しますが、主食と好みの副食は各自でご用意ください。

ご案内：参加者には蓮花寺大杉公園キャンプ場の地図などを別途おしらせします。

ホテル・ニューオータニ長岡（上越新幹線、長岡駅直近）長岡市台町2-8-35 TEL；  
0258-37-1111（代表）ツイン中心、女性用シングルの用意もあります。女性お一人や、ご夫妻での参加を歓迎します。

費用：天ぷらパーティー代¥1500、宿泊代（2食付き）¥10000、駐車代（1台）¥840

大酒飲み？は別途徴収があります。往復の車に関する支払いは車単位で清算を願います。

申し込み：3/末日までに下記幹事宛、メール、または電話にて（コース別、車提供の可否、希望する同乗車を含めて）連絡願います。

小柴清之 koshibakiyoyuki@yahoo.co.jp 042-327-4321

早坂弘次 kouji-h@c3-net.ne.jp 045-823-4430

仲西周二 guizumo@jcom.home.ne.jp 03-3397-5412

その他：\*酒類の持込 OK です。つまみ、酒類の差し入れ大歓迎（事前にご連絡をいただけるともっと助かります）

\*ネットの集中を避け地域の方への配慮等から、今回はポイントへのご案内はいた

しません。採集を希望される方には情報交換や書物等で事前の準備を怠りませんように…どうしても自信なくお困りの場合は幹事にご相談ください。

\*天ぷらパーティー用の備品（コンロ、鍋、椅子、テーブル他）を貸し出し可能な方はご協力をお願いします。

\*ホテル・ニューオータニ長岡の総支配人の吉崎さんは著名な虫屋で、多摩虫会員にも知己が多く、前回どうように今回も特別サービスを沢山載せております。

\*参加者が確定次第、車の乗り合わせ計画他詳細のご案内などをいたします。

お知らせ：来期の当会としては30周年記念行事に全力投球のため、春の行事は計画できない可能性大です。できるだけ今回に参加されることをお勧めします。なお、来期の同企画は群蝶会が引き継いで計画してくれるそうなので、お知らせがありVIP待遇？で個人参加は可能かと思えます。

\* 住所変更、メルアド変更

津田 増夫 〒167-0053 杉並区西荻南 2-28-24 携帯：090-4848-6514

富尾 晃正 t-tomio@ba2.so-net.ne.jp

\* 新聞紙上より

**絶滅危機100万種？**

気象庁によると、日本の平均気温は、20世紀の100年で1.06度高まった。桜の開花はこの50年で平均5日早まり、紅葉は2週間遅くなった。今後100年で平均気温はさらに2.3度上昇すると予測される。

「温暖化の影響は、気温の変化に弱い動植物から現れる」というのが、国立環境研究所の原沢英夫・社会環境システム研究領域長の考えだ。生息しやすい環境に移動するかのようには九州・四国が北限だったナガサキアゲハは最近、関東でも見られるようになった。

龍谷大の増田啓子教授は「都市部ではヒトアイランドの影響も加わっている」と指摘する。昨秋の京都では、紅葉の時期がずれただけでなく、赤く色づく前に枯れてしまった葉が目立ったという。「四季折々の風景が変わってしまう」と、増田教授は懸念する。

地球レベルでも、北米大陸のアカキツネが北極地方へ移動し、ホッキョクグマの生息を脅かしている。このまま温暖化が進めば、2050年までに100万種以上の陸生動植物が絶滅する危険があるという英国の研究者らの報告もある。

異変を敏感に察知する動植物たちの行動は、我々への警告のシグナルといえる。

06.1.25 読ん

# 春は来る 駆けて

06.3.5 読売

地球温暖化の影響で春を告げる動植物の目覚めに異変が生じていることが、気象庁の調査で判明した。今年のサクラ（ソメイヨシノ）の開花は平年より早い地点が多い見込みだが、気象庁観測部が過去50年間の変化を分析したところ、開花は4・2日、満開になる日は4・3日も早まっていた。ウメやツバキ、タンポポの開花日も9・4日5・4日早くなっていた。

## 動植物の「季節現象」の変化 (気象庁調べ 1953年～2004年)

| 現象        | 過去50年間の変化 |
|-----------|-----------|
| サクラ開花     | 4.2日早く    |
| サクラ満開     | 4.3日早く    |
| ウメ開花      | 3.4日早く    |
| ツバキ開花     | 9.4日早く    |
| タンポポ開花    | 6.0日早く    |
| ウグイス初鳴き   | 3.8日遅く    |
| モンシロチョウ初見 | 6.8日遅く    |

### 50年前より

## サクラ4日 ツバキ9日早く開花

こうした傾向は、ヒートアイランド現象の影響もあって、大都市の方が大きい。サクラの開花日は、札幌、

仙台、東京、名古屋、京都、福岡の6都市で平均6・1日早まった。特に福岡では、9・4日も早くなっている。

一方、動物の異変はちょっと複雑だ。厚庁が調査しているウグイスの初鳴きは過去50年間で3・8日、モンシロチョウ

ウの初見は6・8日も遅くなった。キアゲハ、トノサマガエル、シオカラトンボ、ホタルの初見も遅くなっている。

ウグイスの初鳴きなどは、気温が高くなると本来早くなるはず。厚庁は「生息数が減少すると、目につきにくくなる。動物の季節現象の異変には、環境変化が影響しているのだろう」と推測している。

昨年夏の夕方、自宅マンションのエレベーターを降りると、正面の白壁に赤トンボがとまっていた。フウセン、こんなところに赤トンボがとまってる。なんとなくうれしくなった。近よらないで、そっと歩いた。赤トンボは飛び立たず、とまっていた。

翌朝、大学に出かけるときもそこにとまっていた。一晩ここでお休みしたのね。よく寝られたかしら。じゃ、赤トンボさん、仕事に行ってくるからね。

その晩、大学から帰宅した時もとまっていた。あれ、今夜もここでお泊りかい。

その赤トンボが、秋になっても冬になっても、マンションの壁にとまってる。もちろん、もう死んでるはずだ。しかし、エレベーターホールの壁にとまったまま落ちずにいる。カガキ親子、タマちゃん



白楽のクビル  
不肖無精

## 「トンボで成り金」の夢

06.1.21 読(4)

ド根性大根など、誰が仕掛けるのか知らないが、庶民は、生き物の話題を楽しんでいる。この赤トンボも庶民を元気づけてくれるだろうか？

これから受験シーズンを迎える。死んでも「落ちない」赤トンボは、受験生の合格祈願マスコットにどうだろう。試験室で、トンボの形のペンダントを下げ、トンボの形の消しゴムを使う。死んでも落ちない「合格グッズ」。これでウン億円もつけて研究費の足しにしよう。不肖・ハクタク、赤トンボの写真を撮り、成り金の夢を見る。

しかし、自宅マンションにマスコミがどくと押し寄せると、住民が苦情を言う。コラムに書かないで受験産業にコツコツ依頼しよう。

と、ところが、先日朝、ナント、エレベーターホールの床に赤トンボが落ちていた。ああ、赤トンボで成り金の夢を見たばかりだったのに。

(今年も白昼夢ばかりの、お茶の水女子大学教授)

## のんびりエコ旅

「海へのヤマカガシですか。触らないまじしてださい」。ママもいそいそと、インシシが道脇のげけを崩しているエモもある。下の小山はサワガニやシュレーゲルアオガエルもいる。

貴重な生物も多い。絶滅危惧種のキフチョウや国産のオオムラサキ、日本最小のトンボで「赤い妖精」と呼ばれるハッチョウトンボがいる。春に花を付けるシロフシ、夏に花咲く湿地帯の昆虫植物トカイモ、西園にある森の入り口駐車場から、自然観察指導員の大島啓二さんと69と一緒に海上の森へ向かう。大島さんは毎月第一水曜日希望者を募り、この森を案内している。「能く近く、これほど自然が残っている所はありません」

長年の植林事業によるギジキの人ミヤや、ユラ、アベキなどの雑林が広がる。木漏れ日の中、ゆるやかな山道を進む。

この白い花はイワカラミ。大島さんはあちこちで立ち止まり、道はたの草木を解説していく。「これはアラカシ。動物園のツウが体調悪いときに食べさせます。バリバリ音を立てて食べると、見た人はウウッとします」。ユモアぶらぶらでしかも要を得た説明に路傍の野草も運々と感じられる。

気が付くと、ホトトギスやキタキ、オオリなどの鳴き声が聞こえる。夏はサンショウウオの繁殖期だ。アゲハチョウやシオカラトンボが舞い、カミキリムシや青い背中をしたハナムシの卵を出す。

驚いたのは道の真ん中を雑々と横断しているヘビがいたことだ。「海へのヤマカガシですか。触らないまじしてださい」。ママもいそいそと、インシシが道脇のげけを崩しているエモもある。下の小山はサワガニやシュレーゲルアオガエルもいる。

貴重な生物も多い。絶滅危惧種のキフチョウや国産のオオムラサキ、日本最小のトンボで「赤い妖精」と呼ばれるハッチョウトンボがいる。春に花を付けるシロフシ、夏に花咲く湿地帯の昆虫植物トカイモ、西園にある森の入り口駐車場から、自然観察指導員の大島啓二さんと69と一緒に海上の森へ向かう。大島さんは毎月第一水曜日希望者を募り、この森を案内している。「能く近く、これほど自然が残っている所はありません」

長年の植林事業によるギジキの人ミヤや、ユラ、アベキなどの雑林が広がる。木漏れ日の中、ゆるやかな山道を進む。

この白い花はイワカラミ。大島さんはあちこちで立ち止まり、道はたの草木を解説していく。「これはアラカシ。動物園のツウが体調悪いときに食べさせます。バリバリ音を立てて食べると、見た人はウウッとします」。ユモアぶらぶらでしかも要を得た説明に路傍の野草も運々と感じられる。

気が付くと、ホトトギスやキタキ、オオリなどの鳴き声が聞こえる。夏はサンショウウオの繁殖期だ。アゲハチョウやシオカラトンボが舞い、カミキリムシや青い背中をしたハナムシの卵を出す。

驚いたのは道の真ん中を雑々と横断しているヘビがいたことだ。「海へのヤマカガシですか。触らないまじしてださい」。ママもいそいそと、インシシが道脇のげけを崩しているエモもある。下の小山はサワガニやシュレーゲルアオガエルもいる。

貴重な生物も多い。絶滅危惧種のキフチョウや国産のオオムラサキ、日本最小のトンボで「赤い妖精」と呼ばれるハッチョウトンボがいる。春に花を付けるシロフシ、夏に花咲く湿地帯の昆虫植物トカイモ、西園にある森の入り口駐車場から、自然観察指導員の大島啓二さんと69と一緒に海上の森へ向かう。大島さんは毎月第一水曜日希望者を募り、この森を案内している。「能く近く、これほど自然が残っている所はありません」

長年の植林事業によるギジキの人ミヤや、ユラ、アベキなどの雑林が広がる。木漏れ日の中、ゆるやかな山道を進む。

この白い花はイワカラミ。大島さんはあちこちで立ち止まり、道はたの草木を解説していく。「これはアラカシ。動物園のツウが体調悪いときに食べさせます。バリバリ音を立てて食べると、見た人はウウッとします」。ユモアぶらぶらでしかも要を得た説明に路傍の野草も運々と感じられる。

気が付くと、ホトトギスやキタキ、オオリなどの鳴き声が聞こえる。夏はサンショウウオの繁殖期だ。アゲハチョウやシオカラトンボが舞い、カミキリムシや青い背中をしたハナムシの卵を出す。

驚いたのは道の真ん中を雑々と横断しているヘビがいたことだ。「海へのヤマカガシですか。触らないまじしてださい」。ママもいそいそと、インシシが道脇のげけを崩しているエモもある。下の小山はサワガニやシュレーゲルアオガエルもいる。

貴重な生物も多い。絶滅危惧種のキフチョウや国産のオオムラサキ、日本最小のトンボで「赤い妖精」と呼ばれるハッチョウトンボがいる。春に花を付けるシロフシ、夏に花咲く湿地帯の昆虫植物トカイモ、西園にある森の入り口駐車場から、自然観察指導員の大島啓二さんと69と一緒に海上の森へ向かう。大島さんは毎月第一水曜日希望者を募り、この森を案内している。「能く近く、これほど自然が残っている所はありません」

長年の植林事業によるギジキの人ミヤや、ユラ、アベキなどの雑林が広がる。木漏れ日の中、ゆるやかな山道を進む。

この白い花はイワカラミ。大島さんはあちこちで立ち止まり、道はたの草木を解説していく。「これはアラカシ。動物園のツウが体調悪いときに食べさせます。バリバリ音を立てて食べると、見た人はウウッとします」。ユモアぶらぶらでしかも要を得た説明に路傍の野草も運々と感じられる。

気が付くと、ホトトギスやキタキ、オオリなどの鳴き声が聞こえる。夏はサンショウウオの繁殖期だ。アゲハチョウやシオカラトンボが舞い、カミキリムシや青い背中をしたハナムシの卵を出す。

驚いたのは道の真ん中を雑々と横断しているヘビがいたことだ。「海へのヤマカガシですか。触らないまじしてださい」。ママもいそいそと、インシシが道脇のげけを崩しているエモもある。下の小山はサワガニやシュレーゲルアオガエルもいる。

貴重な生物も多い。絶滅危惧種のキフチョウや国産のオオムラサキ、日本最小のトンボで「赤い妖精」と呼ばれるハッチョウトンボがいる。春に花を付けるシロフシ、夏に花咲く湿地帯の昆虫植物トカイモ、西園にある森の入り口駐車場から、自然観察指導員の大島啓二さんと69と一緒に海上の森へ向かう。大島さんは毎月第一水曜日希望者を募り、この森を案内している。「能く近く、これほど自然が残っている所はありません」

長年の植林事業によるギジキの人ミヤや、ユラ、アベキなどの雑林が広がる。木漏れ日の中、ゆるやかな山道を進む。

この白い花はイワカラミ。大島さんはあちこちで立ち止まり、道はたの草木を解説していく。「これはアラカシ。動物園のツウが体調悪いときに食べさせます。バリバリ音を立てて食べると、見た人はウウッとします」。ユモアぶらぶらでしかも要を得た説明に路傍の野草も運々と感じられる。

気が付くと、ホトトギスやキタキ、オオリなどの鳴き声が聞こえる。夏はサンショウウオの繁殖期だ。アゲハチョウやシオカラトンボが舞い、カミキリムシや青い背中をしたハナムシの卵を出す。

驚いたのは道の真ん中を雑々と横断しているヘビがいたことだ。「海へのヤマカガシですか。触らないまじしてださい」。ママもいそいそと、インシシが道脇のげけを崩しているエモもある。下の小山はサワガニやシュレーゲルアオガエルもいる。

貴重な生物も多い。絶滅危惧種のキフチョウや国産のオオムラサキ、日本最小のトンボで「赤い妖精」と呼ばれるハッチョウトンボがいる。春に花を付けるシロフシ、夏に花咲く湿地帯の昆虫植物トカイモ、西園にある森の入り口駐車場から、自然観察指導員の大島啓二さんと69と一緒に海上の森へ向かう。大島さんは毎月第一水曜日希望者を募り、この森を案内している。「能く近く、これほど自然が残っている所はありません」

長年の植林事業によるギジキの人ミヤや、ユラ、アベキなどの雑林が広がる。木漏れ日の中、ゆるやかな山道を進む。

この白い花はイワカラミ。大島さんはあちこちで立ち止まり、道はたの草木を解説していく。「これはアラカシ。動物園のツウが体調悪いときに食べさせます。バリバリ音を立てて食べると、見た人はウウッとします」。ユモアぶらぶらでしかも要を得た説明に路傍の野草も運々と感じられる。

気が付くと、ホトトギスやキタキ、オオリなどの鳴き声が聞こえる。夏はサンショウウオの繁殖期だ。アゲハチョウやシオカラトンボが舞い、カミキリムシや青い背中をしたハナムシの卵を出す。

驚いたのは道の真ん中を雑々と横断しているヘビがいたことだ。「海へのヤマカガシですか。触らないまじしてださい」。ママもいそいそと、インシシが道脇のげけを崩しているエモもある。下の小山はサワガニやシュレーゲルアオガエルもいる。

貴重な生物も多い。絶滅危惧種のキフチョウや国産のオオムラサキ、日本最小のトンボで「赤い妖精」と呼ばれるハッチョウトンボがいる。春に花を付けるシロフシ、夏に花咲く湿地帯の昆虫植物トカイモ、西園にある森の入り口駐車場から、自然観察指導員の大島啓二さんと69と一緒に海上の森へ向かう。大島さんは毎月第一水曜日希望者を募り、この森を案内している。「能く近く、これほど自然が残っている所はありません」

イラスト カサネ・台